

国際ハインリッヒ・シュッツ協会

日本支部事務局ニュース ⑭ (電子版)

2014年7月10日

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965年3月28日

支部長 正木光江
事務局長 荒川恒子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュース編集 荒川恒子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み(4)

さて今回は、正木支部長が日本支部事務局長に就任された1967年から、尾崎喜八氏の詩「ハインリッヒ・シュッツ」の第一節が、1969年『アクタ・サギタリアーナ』の表紙を飾ったこと、また1960年代の日本のバロック音楽受容等に関して、お知らせしました。なお『アクタ』は、1963年から「国際」という名称を冠するようになった本部で、同年に発刊が始まりました。当初は季刊誌と呼べるようなものではなかったそうです。1963年から66年までは年に4冊、67年が3冊、68年から75年が2冊、76年以降は1冊になりますが、97/98、98/99という具合に年度をまたいでいる年が08/09まで続き、それ以降は1冊の発行です。また1963年から1965年までは独語のみで執筆されましたが、1/1966年から現代に至るまで、同一内容が、独・英・仏語で書かれています。些細なことながら「国際」と冠する協会の御心遣いを感じられます。なお最近では半年遅れで、日本に届くのは夏、今年はさらに遅く、秋風の吹く頃、国際大会の開催ぎりぎりになることでしょうか。と書きますと、いかにも最近では活動が鈍くなったように、感じられるかもしれませんが、しかしそれは違います。例えば正木支部長の言によりますと、1965年の冊子はザラバン紙5枚をホチキスで留めた簡易なものであったとのこと。しかし今では1979年から毎年1冊発行されている研究誌『シュッツ・ヤールブーホ』と並び、本協会の会員にとって情報誌、交流誌として重要な役割を果たしています。国際大会の開催、事後報告、支部通信、シュッツを中心とする演奏グループの紹介記事、CDリリースの案内等、その編集にはかなりの精力と金額が使われています。本協会の未来を見据えた、会員へのサービスの一環といえましょう。なお編集者として、2/1965年からジークリンデ・シュピルナーさん、即ち今の本部事務局長で、ドイツ支部長フレリヒ女史の御名前が旧姓で記載されています。まさに彼女こそ、本協会を約半世紀の長きに渡り支えてくださった、縁の下の力持ちであることが分かります。

さて私の手元に1975年9月1日現在ということで、日本支部の会員名簿があります。何とその時の会員数は84名に及びます。その中で現在も会員の方を「あいうえお」順に挙げますと、井形ちづる、高井雅敏、淡野弓子、野本 元、山下道子、舟橋一郎、正木光江、榊田武志各氏、そして荒川恒子（1967年には会員であった橋本周子さんは、一時退会され2008年から再入会されました）のみとなりました。なお前号で書き落としましたが、淡野(旧姓大橋)弓子さんは1968年9月14日、すなわち「ハインリッヒ・シュッツ合唱団・東京 第1回コンサート」のまさに当日に、また野本 元様は1970年に入会されました。

さて話は変わりますが、日本支部50年目に入る2014年の新年を祝して、1月13日(月・祝)12:00-15:00にドイツ料理 カイテル(Keitel) (東京都新宿区新宿5丁目6-4)で懇親会を開催したことは、皆様の記憶に新しいことでしょうか。当日の出席者は正木支部長、淡野弓子、寺本まり子、高橋美紗、野本 元、山下道子各氏と荒川恒子の7名で、こじんまりとした会でした。まずカイテルさんのサービスと自慢の腕を振るった御料理、蕈蓄を傾けたドイツ料理や飲物のお話で耳を傾けました。しかし話題はすぐに「事務局ニュースレター第13号」の冒頭に掲げた尾崎喜八の詩に移り、尾崎と親しかった野本さんより、親交にいたったいきさつ等を伺いました。さらに元会員であった串田孫一さんをも含めて、「自然、山、音楽、絵画」活動のこと、野本さんからはまた、戦時中に疎開された信州での生活、はたまた思い出の山の文芸誌「アルプ」の発刊と終刊の事情を、まことに正直に記した山口耀久著『「アルプ」の時代』(2013、山と溪谷社)のこと等を、当日また後日もメール等を通して、お教え頂きました。同年配の参加者には、実感と思いの詰まった、またより若い世代の方にとっては、是非聞いておかなければ、といった濃い内容の話題となりました。そして和気あいあいとした中で、再会を約しました。

その後も当日お聞きした内容が、頭から離れなく、ここは是非御無理をお願いし、当日残念ながら不参加であった方、特に若い会員にもお伝えしたいということで、野本 元様にごく個人的な、また野本さんでなければ書けない内容を、とお願いいたしました。大変記憶力の良い方、またそれだけでなくメモをきちんとお取りになる方であることは、少ないお付き合いの中からも感じられました。氏は忙中資料をひっくり返し、丁寧に長時間かけて御執筆くださいました。それは本協会小史に肉付けして下さる大切な内容となりました。皆様からも付加、御訂正等いただき、本小史をより正確に、また膨らませることができれば幸いです。(荒川恒子記)

ハインリッヒ・シュッツとその音楽を求めて

会員 野本 元

荒川恒子先生のお薦めもあり本会誌に拙文を寄稿させていただくことになりました。音楽の単なる愛好者であり、しかも自分では歌うことも楽器を扱うこともできない人間です。ただシュッツの音楽を発信する方々の演奏やそれらによる CD (SP, LP 時代も体験しましたが) を聴き、演奏者と喜びを共有し、楽しみ、日毎の生活への活力を享受し、シュッツを敬愛して止まぬ人間に過ぎません。お目をお通し下さり種々ご教示下されれば幸いの極みです。

1. ことのはじまり

初めてシュッツの音楽を聴いたのは何時かはっきりと憶えていません。それどころかハインリッヒ・シュッツという名を知ったのも明確ではありません。確かな記憶にあるのは大学 4 年生の 1957 年 8 月、友人 2 名とともに軽井沢・星野温泉における 20 世紀音楽研究所(所長・吉田秀和氏)主催の第 1 回現代音楽祭に参加した時です。前日の公開練習まで含めて 4 日間、ウーバーン、ブルー(プログラムにはブルーーズではなく)、シュトックハウゼンや研究所員である黛、諸井、柴田、入野諸氏の新作が演奏されました。最終日の午前は公開討議であり、午後はメシアン、シェーンベルク、ストラヴィンスキー、ベルクの作品の演奏。それに引き続きパーティーが行われました。この現代音楽祭のパーティーであるにもかかわらず、同じく参加された音大生から 4 日間聴いた 20 世紀の音楽から時間を 300 年以上遡るバロック音楽のシュッツとその師でもあるモンテヴェルディについて熱烈的な賛美に溢れた講義を受け洗脳(?) されて以来、この二人の音楽を是非とも聴きたいと思っていました(後日、この「20 世紀研究所を支持する会」を吉田所長から許可を頂戴し、上記 2 名の友人と木村重雄さんを顧問にお願い、当時早稲田大学の学生であった黒田恭一さんも含め結成。毎月例会を開き、所員や他の作曲家、演奏家の方々をお招きしお話しを伺いました。)

モンテヴェルディに関しては高校 3 年生か浪人中、真夜中の進駐軍向け FEN ラジオで、従来聴いたこともない敬虔さと甘美さとが美しくまた力強さも感じさせる独唱、合唱とオーケストラによる宗教曲を聴き、勉強を中断し聴き耳をたてました。まだ、現在のようにイヤホーンもない時代であり、ラジオとともに頭から分厚い毛布をかぶり、懐中電灯の光で本を読み、ノートをとりながらでした。後年、その音楽はグイド・カンテルリ指揮のモンテヴェルディの《聖母マリアに捧げる夕べの祈り》の〈マグニフィカート〉(7 声)であったと知りました。その曲目は柴田南雄さんから伺ったと記憶しています。また、1967 年 12 月の L. von マタチッチ指揮・N響定期演奏会で全曲を聴き(勤務を休み当日売りで)、その後発売されたミッシェル・コルボ指揮による LP をむさぼるように繰り返し聴きました。モンテヴェルディの LP は 1957 年《オルフェオ》がグラモフォン社のアルヒーヴ盤として、またマドリガル《忠実な羊飼い》がマレンツィオの同名の曲と表裏の LP がありました。

しかし、シュッツの音楽の LP を見掛けることはなかなかできませんでした。日本盤は勿論のこと輸入盤も見掛けませんでした。そのような時期に偶然最初の輸入盤を購入でき、その後何曲かを聴く機会がありました。

2. LP 時代のシュッツの音楽

最初に入手した LP は《イエス・キリスト誕生の物語＝クリスマス・オラトリオまたは物語》です。軽井沢でシュッツに興味を抱いて半年も経たぬ 1957 年のクリスマス前に、銀座・日本楽器で輸入盤コーナーからクリスマスに相応しい曲を探している時でした。その中でキリストを抱く聖母を描いた美しい絵のジャケットに眼が止まりました。シュッツとの出会いの瞬間でした。中央の青色の着衣で膝に幼子イエス抱き、薔薇の垣根の前に座り、その周囲には楽器を持つ天使が喜びの曲を奏でている美しい絵でした。画集でイタリア・ルネッサンスの巨匠たちの手になる聖母子像を見ていましたが、珍しくもドイツ・ルネッサンスの画家の絵によるものであり、シュッツの作品ならば何でも構わないと思ったことと、その絵に誘われてシュッツを聴くことになり、今でもその画家に感謝しています。その絵は後年ケルンのヴァルラーフ・リヒャルト博物館で観たシュテファン・ロッホナーの祭壇画『薔薇垣の聖母子』でした。

そのLPはカンターテ盤のW. エーマン指揮、ウエストファーレン合唱団による演奏でした。曲の冒頭の楽器の合奏とともに合唱が荘重ではあるが清く明るい喜びに満ち溢れイエス誕生の物語に相応しい音楽であり、天界から贈られた音楽のようでもあり、シュッツの世界に引き込まれました。その後続く福音歌手・テノールが通奏低音の上に清らかな、力強いレチタティーヴォで聖書の言葉を語り始めると幸福感すら感じました。天使、羊飼いや独唱や合唱ではそれぞれに相応しい楽器が奏でられていることに興味も抱きました。さらに、最終曲の輝かしい楽器群を伴った合唱の中でも singen, singen と何度も繰り返される歓喜の歌には感動を呼び起こしました。この最終合唱による感動はこの最初だけではなく、聴くたびに常に新鮮に響き、心が喜びではち切れそうになります。偶然にも最初にシュッツ晩年の多数の傑作の中でも特に親しみやすいこの曲の洗礼を受けたことは幸運そのものでした。これと同じことを服部先生が日本グラモフォン(株)・アルヒーヴ友の会員に配布された季刊『アルヒーヴ』1962年2巻に『シュッツの音楽とレコード』で記されておられます。少し長いのですが引用させていただきます。

私にとって《クリスマス・オラトリオ》を通じてのシュッツとの出会いは、大変幸せであった。もちろん、シュッツ晩年の最高の名作の一つだが、それに加えて、この作品はシュッツのあらゆる作品の中で、一番なじみやすいものである。その後十年たった今では、シュッツの作品から一番好きな曲をあげよといわれれば、まず《ムジカーリッシュ・エクセクイエン》(ドイツ鎮魂ミサ曲)あたりが頭に浮かぶが、この曲のどこまでもじみで、底光りがする美しさにもし最初にふれたとしたら、私がシュッツをそれほど興味深く思ったかどうか(後略)。

なお、この『アルヒーヴ』には正木先生、荒川先生等も寄稿されておられます。

服部先生の言のように、購入したばかりのLPを友人の家でのクリスマス・パーティーで聴いてもらいましたが、大好評でした。また、当時信州富士見高原から世田谷上野毛の淡烟草舎に移住された詩人・尾崎喜八さんにも暮れのご挨拶に参上した際、お聴き頂きたくて持参しました。詩人はロマン・ロランによってシュッツの名はご存知でしたが、音楽をお聴きになるのは初めてと伺いました。

2枚目は昭和35年(1960年)7月に同じく日本楽器で購入した『Music of Heinrich Schütz』であり、I. ストラヴィンスキーお気に入りのロバート・クラフト指揮のLPでした。ジャケット左側半分の上にはシュッツの87歳の肖像画があり、下部半分はドレスデンのSchlosskircheでシュッツが合唱隊に囲まれて指揮をする有名な絵であるとの説明がありました。ジャケット裏側の曲目を見ると、3曲目に〈Es ging ein Samen aus, zu säen seinen Samen〉(SWV 408)《Symphoniae Sacrae 3巻》がありました。これを見た瞬間、今考える大変恥ずかしいことですがブラームスのレクイエム第1楽章の〈Die mit Tränen säen, werden mit Freuden ernten〉と勘違いして嬉しくなり飛び付きました。この勘違いが幸いをもたらし、シュッツの《クリスマス物語》以外の初期から中期に掛けての宗教的な合唱曲を知ることになりました。後年この詩篇第126章第5節、6節は《ダヴィデ詩篇 Psalmen Davids》や《宗教的合唱曲集 Geistliche Chormusik》で聴くことになります。《ダヴィデ詩篇》で作曲されている〈Wie lieblich sind deine Wohnungen〉はブラームスも第4楽章で用いています。また同じくブラームスの最終楽章でマタイ伝第5章の〈Selig sind die Totende〉も《Geistliche Chormusik》でシュッツは作曲していることを知りました。ブラームスのレクイエムは若きカラヤンがエリザベート・シュヴァルツコッフとハンス・ホッターを独唱者に迎えたSPを自作の再生装置(数年後にはヤマハの安い装置に切り替えました)で聴いていました。歌詞をノートしましたが、今もそのノートは健在です。クラフトのLPはこの他に1. Attendite, popule meus (SWV 270); 4. Anima mea liquefacta est (SWV 263); 5. Adjuro vos, filiae Jerusalem (SWV 264); 8. Fili mi, Absalon (SWV 269) が《Symphoniae Sacrae 1》であり、2. Du Schalksknecht (SWV 397)が《Geistliche Chormusik》;そして《Cantiones Sacrae》から 6. Deus, misereatur nostri (SWV 55); 7. Inter brachia Salvatoris mei (SWV 82)の2曲と合計8曲が入っていました。このLPを初めて聴いた時には、《クリスマス物語》とは異なり、渋い地味な音楽であると感じました。いずれの曲も似ており区別し難いとさえ感じました。ただ声楽部とともに演奏される楽器群は当時まだバロック楽器の使用は殆どなく現在の楽器であり特に金管楽器はとても華やかな響きで奏でられており少々戸惑いました。しかし、今考えるとこれもG. ガブリエリの弟子のシュッツなので当然なのかもしれない、現在の教会でこのように鳴り響くのも良いかと思いました(後年1968年に明治百年記念芸

術祭参加LPとして、ヴェネツィア・サン・マルコ聖堂での『THE GLORY OF GABRIELI』と称してパワー・ビッグスのオルガン、合唱、金管楽器による演奏で、G. ガブリエリの第1 旋法から第10 旋法までのオルガンのためのイントナツィオーネからの数曲を録音したLPがありました。

なお、シュッツを数曲聴いただけの人間にこの時一つの疑問が生じたことが(うろ覚えですが)ありました。この時代にはルターの旧約、新約聖書がドイツ語に翻訳されており、これを大事にして《クリスマス物語》はドイツ語聖書からの歌詞であるが、これに反しこのクラフト指揮の時には詩篇はラテン語であるのは何故かが問題でした。バッハにも口短調ミサ曲があり、これはカトリック音楽のミサ通常文を使用することはもの本で読んではいませんが。

この頃になると数枚のLP からなる音楽史の録音が詳細な解説がされたテキストと共に販売されました。中にはドイツ・バロック音楽の代表の1 曲としてシュッツも採用されていました。

1958 年秋には服部幸三先生の翻訳でカール・パリシュ、ジョン・オール共著『音楽史 グレゴリア聖歌からバッハまで』(音楽之友社)が日本ビクター(ハイドン協会シリーズ)から3 枚のLP と同時に発売されました。本書には各曲とも楽譜が付されていました。このシリーズではシュッツの曲は宗教的カンタータ《Symphiarum sacrarum 3》のコンチェルト〈おお、主よ、助けたまえ〉(SWV 402)が収録されています。

これと同じ年1958 年3 月に日本グラモフォン編として『西洋音楽史 上・下』が所謂ドーナツ盤5 枚ずつ、上・下で10 枚の組ものとして発売されました。ドイツ・バロックの章は服部幸三先生が解説されており、概観に引き続きH. シュッツが「17 世紀ドイツ音楽のもっとも偉大な人物である。(中略)の教会音楽はバロックのカトリック音楽にもっとも近いものではあるが、晩年になるに従ってますます独自の崇高さに達した。大バッハの復興につづいて、シュッツの再認識が深まって来たのは当然のことである」と記されています。残念ながらこのシリーズ10 枚にはシュッツの音楽は含まれていませんでした。

また、1959 年秋には新オックスフォード音楽史『耳による音楽史』が10 巻、各2 枚のLP と各巻ごとにジェラルド・エイブラハム氏を代表とする編集者による解説が楽譜の一部付きで付されています。このうち第5 巻「歌劇と教会音楽」に、ドイツの教会カンタータ(1)としてシュッツの《シンフォニア・サクレ第3 巻》の〈サウル、サウル、何故汝我を追うや?〉(SWV 415)とドイツの受難楽として《十字架上の七言》(SWV 478)の最もイエスの悲痛な叫び「父よ、父よ、我はわが霊を汝の手に委ねんとす」を中心にイエスとエヴァンゲリストとの対話が収められていました。

これと同じく1959 年秋に東京混声合唱団・創立3 周年記念行事として4 夜にわたる、グレゴリア聖歌から中世・ルネッサンスを経てシェーンベルク、メシアンまでの合唱曲の連続演奏会が開催されました。同時に演奏会と同じ曲を同名の「合唱の歴史」という10 インチ盤4 枚のLP に収め発売されました。

この演奏会ではシュッツは第2 夜(バロック、古典派、ロマン派)に《ムジカリッシェ・エクセクイエン》(SWV 494)から〈シメオンの歌〉が選曲されています。

このようにわが国でも演奏会やLP を通じシュッツの音楽が徐々に知られ始められたと思います。

同時にドイツLP レーベルであるKANTATE からEhmann 指揮のウエストファーレン合唱団のシュッツの作品の輸入盤が入手できるようになりました。また、ドイツ・グラモフォンでもシュッツの作品が吹きこまれ始めました。幸か不幸かこれらシュッツのLP はモーツァルト、ベートーヴェン等とは異なり毎月出ることではなく、学生時代にもまた安給料取りにでも3、4 カ月置きの新盤発売とともに購入することが可能でした。

まず、1961 年11 月には《イエスキリストの復活の物語》、1962 年5 月には《マタイ受難曲》、7 月は《ガイストリッヒ合唱曲集; 14 のモテット》、9 月は《ムジカリッシェ・エクセクイエン》と発売されました。《ルカ受難曲》と『二重合唱のモテット作品2 とマニフィカート(SWV 494)』は1967 年、《十字架上のキリストの七つの言葉》が1968 年でした。その後約10 年を経過しやっと1977 年に《イタリア・マドリガーレ全集》(SWV 1-19, 1611 年)が出て、指揮者J. ユルゲンスの解説やその解説の翻訳とともに正木先生の歌詞対訳と詳細・克明な解説が若きシュッツのイタリア留学の成果を示して下さいました。これ以前に聴いていたマレンツィオやモンテヴェルディの《忠実な羊飼ひ》(シュッツのこの曲集にも同じP. ガリアーニからの詩による作品もありましたが残念ながら同

じ詩による曲は含まれていません) や他のマドリガルとシュッツのそれとを聴き比べして、イタリア伝統に沿ったマドリガルの劇的表現を守りながらもドイツ人の心を読み取ることが出来ました。私が持っているアルヒーヴのシュッツ作品の最後は《ダヴィデ詩篇》(SWV 22-47、1619年)です。このLPはシュッツ没後300年記念録音であり、レーゲンスブルク大聖堂少年聖歌隊、ハンブルク古典管楽器アンサンブル、H. = M. シュナイト指揮であり、1972年度ドイツ・レコード賞受賞LPでした。この曲集も前記《イタリア・マドリガル曲集》に引き続き若い頃の作品であり、イタリア音楽らしい若々しい強さをもつ劇的な音楽として感じとり、繰り返し聴くたびにその偉大さも理解できるようになり、それまでに聴いていたシュッツの音楽の大きな礎になる作品だと思えるようになりました。

これら録音媒体によるシュッツの中で最も感嘆したのは三曲の受難曲でした。特に《マタイ受難曲》はバッハのそれと比べたくなるのは当然です。全く素人の寝言を言わせていただければ、バッハの《マタイ受難曲》の抒情的なダ・カッポ・アリアは無用とすら考えていました。エヴァンゲリストの朗唱、イエスや弟子の言葉、ピラトや民衆の言葉の独唱や合唱、コラールだけで充分であると。それがシュッツの受難曲、特にマタイ受難曲を聴いた時に受けた衝撃は非常に大きいものでした。骨と肉しかも贅肉をそぎ落としたかのような作品があった！からです。バッハよりも簡潔で直截的でありながら独唱、合唱の劇的表現に圧倒されました。

当初、国際ハインリッヒ・シュッツ協会から毎年『Schütz-Jahrbuch』と『ACTA SAGITTARIANA』とともにLPが1枚送付されて来ました。このLPはシュッツの曲(貴重な曲目、LPでした)ばかりではなくH. ディストラーの曲なども嬉しかったことでした。

その後、CD時代になり輸入盤も多数録音、発売されシュッツの殆どの作品を聴けるようになりました。1971年に入手した『HEINRICH SCHÜTZ WERKE VERZEICHNIS: (SWV) KLEINE AUSGABE』(BÄRENREITER, 1960)を見ると殆ど聴いていることが判ります。これには勿論淡野さんの12年にわたるハインリッヒ・シュッツ全曲演奏会による作品も含まれています。シュッツ全曲演奏会を拝聴する度にこのリストに○印をつけるのが楽しみでした。

3. 演奏会におけるシュッツの音楽

シュッツの音楽を初めて実際に演奏会で聴いたのは、上記東京混声合唱団の連続演奏会『合唱の歴史』を第一生命ホール(第1夜から第3夜まで)と産経ホール(第4夜)聴いたのが最初でした。ジョヴァンニ・ガブリエリの《クリスマス・モテット》(おお、大いなる秘蹟)、クラウディオ・モンテヴェルディ舞踏組曲《音楽のユーモア》と、シュッツにとってはヴェネツィアで師事した二人の師の曲に続いてシュッツが演奏されました。その曲は《ムジカリッシェ・エクゼクイエン》からの〈シメオンの歌〉でした。

その次には渋谷道玄坂上・南平台・聖ヶ丘教会での基督教音楽学会主催の「聖ヶ丘教会オルガン・レサイタル」においてでした。1961年1月15日(日)から10回にわたる連続演奏会の最終日1961年3月19日でした。曲目は、

1. シュス：十字架七言
2. ペルゴレーゼ：スタバトマーテル

であり、木岡英三郎指揮・伴奏により東京混声合唱・古典音楽協会室内楽による演奏でした。ポジティブ・オルガンを木岡氏が弾きながらの指揮による演奏でした。(シュス、ペレゴレーゼ等々はカタログのままです。永井荷風や尾崎喜八がベルリオーズをベルリオとしたのと同じように名前の表記が統一されていませんでした)

ある演奏会で聴いたシュッツは私にとっても極めて大きな出来事に繋がっています。その演奏は1963年7月6日(土)新宿の厚生年金会館ホールにおける遠来のウエストファーレン・ドイツ合唱団によるものでした。尾崎喜八さん、軽井沢の現代音楽祭に同行した川嶋利哉(中学・高校の先輩。医科歯科大学卒。医師)、牛島一郎(大学の研究室で2年先輩の科学史家。このクラスには『西洋の音、日本の耳』、『近代日本洋楽史序説』の著者・中村浩介氏もいた)、家内と一緒に。また、この演奏会で淡野さんがハインリッヒ・シュッツ合唱団を設立し、全作品を演奏する契機になった重要な日であり、もしここで淡野さんがシュッツの《ダヴィデ詩篇》中の一曲〈われ山に向かいて眼をあぐ〉をお聴きにならなければ、私のシュッツは現在のような豊饒な世界とはならなかったでしょう。古いカタログに挟み込まれた「(西ドイツ音楽文化使節) プレ・バッハ音楽の真髄を唱う天上の声！
◎ウエストファーレン・ドイツ合唱団 提供 財団法人 国際文化協会、後援 ドイツ大使館、ユニバーサル株

式会社」と表紙にあり、服部幸三先生による『祈りの歌声！（ウェストファーレン・ドイツ合唱団の来日）』と題する紹介文（筆責・釘本真）があります。恐らく当時の東京ドイツ文化センター（OAG）から送付され、同好者にPRしたのかもしれませんが。演奏曲目はバッハのモテット2曲、ジョスカン・デ・プレの《ミサ・パンジェリング》から数曲（皆川達夫先生の中世音楽合唱団で2回聴いていました）フーゲー・ディストラ2曲（初めて聴く曲でした）とともにシュッツは上記1曲だけでしたが、淡野さんには遠く及びませんが感動を覚えたことは確かでした。

これらの演奏会の後は、淡野さんが結成されたハインリッヒ・シュッツ合唱団による演奏までの間、生のシュッツを聴くことはなかったと記憶しています。

それ以降、今日まで淡野さんが創り出すシュッツの音楽とそのプログラムにおける解説が私のシュッツの大部分を占めています。この場を拝借して衷心から感謝の意を捧げる次第です。

もう一つのシュッツの音楽に傾倒する要因がありました。

終戦直後の出版事情も苦しい時期にみず書房から『ロマン・ロラン全集』が出版され始められました（1948 から 1953 年頃）。その中には膨大な『ベートーヴェン研究』や『ヘンデル』等とともに『ありし日の音楽家たち』、『今日の音楽家たち』、『過去の国への音楽の旅』が出版（または予定で中断された）されました。その後、装いも新たに部分的には翻訳者も変更し、予定通りに全巻刊行されました（1960～1970 年頃）。『今日の音楽家たち』の一部は尾崎喜八が大正5年に雑誌『白樺』に連載し、その後『近代音楽家評伝』として刊行されています。

その全集中の第20巻『近代抒情劇の起源ーリュリおよびスカルラッティ以前のヨーロッパにおけるオペラの歴史ー』（彼の博士論文）の中で言葉を引用すると、イタリアにおける抒情劇について多数の作曲家の名を挙げた後、シュッツに関しても以下のように述べています。

抒情劇はイタリアの外にまで広がる。ガブリエリやモンテヴェルディの弟子たちがそれをドイツに持って行く。シュッツは、すでに1627年にそれを試みている。祖国の不幸（30年戦争）は芸術の祭典には不利であったが、ドイツ劇芸術の才能は時期の好転を待ちつつ、シュッツのみごとな聖シンフォニーのうちに結晶した。
（戸口幸策訳）

また、『ありし日の音楽家たち』には

音楽はまた、ある場合には全然外部にはあらわれない内面的生活の唯一の証人ですらある。（中略）ドイツでは、無言のうちに貯えられた信仰と精力との宝庫を示す。それは30年戦役の間、かつて祖国というものを荒廃させた災禍のなかでもっともはなはだしい災禍の真唯中であって、静かにその逞しい、荘重な、揺るぎない信仰を歌いつづけたあの素晴らしいハインリッヒ・シュッツ（後略）。（野田良之訳）

ロマン・ロランは最近では我が国に限らず、彼の母国フランスですら読者が少なくなっているそうです。しかし、もし私に青春なるものがあつたとすれば、その時代彼の『ジャンクリストフ』をはじめとし『書簡集』『戦時中の日記』、『反戦論』等とともに読みふけた『ベートーヴェン研究』等の『音楽論』は音楽だけではなく、以降の私の一つの人生に指針となった書物でした。その中に見出した上記のシュッツに関する論評を発見した時は大きな喜びをもたらしてくれました。

80歳過ぎてから命を全うするまで、傑作を創造したシュッツとその音楽を敬愛しながらも80歳を機に自ら仕事を辞した自分を省みると忸怩たる思いがつのる毎日です。

以上、私の30歳代の個人的なシュッツの録音音楽体験と貧しいシュッツ音楽の演奏会体験の単なる羅列に終わってしまいました。（続く、次回予告「尾崎喜八とシュッツに関して」）

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京40年の軌跡 (11)

会員 淡野弓子

今回は1994年の〈受難楽の夕べ〉から始めたいと思います。1994年といえば今から20年前、今年発足30周年を迎えた我々のグループ「ムシカ・ポエティカ」が10年目に入った年でした。

3月25日(金)午後7時 東京カテドラル聖マリア大聖堂

〈受難楽の夕べ〉シュッツ全作品連続演奏[XI]

H. シュッツ 《詩編116 Das ist mir lieb わたしは主を愛する》(SWV 51)

H. シュッツ 《最後の晩餐》(SWV 495)

R. マウエルスベルガー 《ルカ受難曲》[日本初演]

ルドルフ・マウエルスベルガー (Rudolf Mauersberger 1889-1971) については、すでに様々な機会にお伝えしてきたように思いますが、この「軌跡」で取り上げるのは初めてのことと思います。

ドレスデンが大空襲に見舞われたのは1945年2月13日、すべてが灰燼に帰した都で、クロイツ教会聖十字架合唱団の少年たちに歌う曲を与えねば、との思いからR. マウエルスベルガーは1947年1月、受難曲の作曲を始め、僅か12日間で書き上げたのが《ルカ受難曲》でした。初演は1947年4月1日、カトリックのHerz-Jesu-Kircheで行われ、人々に強烈な印象を与えます。またこの作品は数ある受難曲の一つという以上の大きな意味を含んでいました。すなわち、敗戦で疲弊した国民と教会の礼拝生活を活気づけ、新しい礼拝形式を生み出して行こうとの強い意志に貫かれているのです。

ルター訳聖書第22章39節から23章56節までがほぼ全部作曲されており、福音史家もイエスも全ての箇所がアンサンブルと合唱で歌われ、勿論ア・カペラです。このような編成は、当時からおよそ300年前の30年戦争たけなわの頃、シュッツが少人数で演奏出来る《小宗教コンチェルト集 Kleine geistliche Konzerte》(1636/1639)などを作曲していたことを思い出させます。恐らくソロの歌える成人男声歌手がいなかったのでしょう。

導入と終結、そして物語の段落にはコラールが置かれています。テキストとメロディは1883年に出版された《ザクセン讃美歌集》からのもので、バッハの用いたコラール歌詞とは視点や意味内容が大きく異なり、1947年初頭のドレスデンの状況が色濃く反映されています。表現は細部に至るまで描写が繊細で、終戦時の苦悩がひたひたと迫り、身につまされ、毎日空腹だった少女時代を思い出すほどでした。この作品に巡り会ったいきさつはこの稿でもう1度お話致します。

4週間後には「クラウディオ」の第3回公演が開催されました。

4月22日(金)午後7時 東京カテドラル聖マリア大聖堂 (Claudio) 第3回公演

C. モンテヴェルディ 《VESPRO 聖母マリアの夕べの祈り》

リコーダー: 守安 功・淡野太郎

コルネット/ リコーダー: 濱田芳通、及川 茂、細川大介

サクソバット: 萩谷克己、利根川勝、巻島俊明

ヴァイオリン: 小野萬里、森田芳子、竹島祐子 ヴィオラ 李 善銘、Stephan Sieben

リュート/ヴィオラ・ダ・ガンバ: 中野哲也

ヴィオラ・ダ・ガンバ: 福沢宏 ドブルツィアン: 川村正明

キタローネ: 竹内太郎 ヴィオローネ: 西澤誠治
チェンバロ: 故 小島芳子 ポジティブ・オルガン: 高橋 全

声楽アンサンブル

ソプラノ I: 柳澤一枝、小役丸佐知子 ソプラノ II: 淡野桃子、大石すみ子
アルト: 石塚瑠美子、羽鳥典子 アルト/ テノール: 細川裕介
テノール: 望月寛之、淡野太郎、依田卓 バリトン: 辻 康介

合唱

アンサンブル・クラウディオ [SI:11/ SII:10/ A:10/ TI:4/ TII:4/ B:6]
国分寺チェンバークワイア[SI:6/ SII:7/ A:11/ TI:3/ TII:3/ B:6]
(合唱指揮: 市瀬寿子)

市瀬寿子さんは今は亡き岡本敏明先生の愛弟子の一人で、オーソドックスな合唱指導法の訓練を受け、1991年、ルネサンス、バロック期の合唱曲をレパートリーの中心に据えた「国分寺チェンバークワイア」を組織、今も大活躍の毎日を送っている指揮者です。シュッツ合唱団でも歌っておられたので、モンテヴェルディをアンサンブル・クラウディオと合同でという話になりました。実は今年(2014年)4月2日、久しぶりにチェンバークワイアともどもバッハ《マタイ受難曲》を演奏したのですが、その時にもこの《ヴェスプロ》の思い出話で賑わったのでした。あつという間の20年でした。偶々の巡り合わせなのでしょうが、今回の「軌跡」を書き出した途端、若かりし「国分寺チェンバークワイア」が登場したので驚いています。

さて、H. J. モーザーの大著『ハインリヒ・シュッツ—生涯と作品』に「…モンテヴェルディ—錬金術師」との記述があります。またC. G. ユングは『心理学と錬金術 I』において、「…科学はこれまで錬金術の化学的側面にしか注意を払わなかった」と述べ、自分はその宗教的側面を提示したいと言っています。「錬金術はキリスト教の地下水である」と言うユングは、男性的父性世界が顕在意識になってくる時点で母性的原初意識は無意識に沈み、顕在意識の補償作用として働いた、と洞察しています。モンテヴェルディの《聖母マリアの夕べの祈り》も作曲技法については研究が進んでいますが、宗教的心理的側面とこの曲の持つ本来の目的についてはほとんど注意が払われていません。

テキストから浮かび上がる隠された秘密はまことに興味深いものがありました。

- ・人間世界に神の子を授けたいという主の意志 (詩編 110 : 第 2 曲)
- ・黒いけれど美しい—卑賤なものが実は美しい (第 3 曲)
- ・弱いものを塵のなかから起こし、乏しいものを芥のなかから高く上げ、子のない女に母の喜びを与える—イエス降誕の預言 (第 4 曲)
- ・2人の天使が歌い交わす場面に3人目の天使が登場し「証しするのは三である」「三は一である」と歌う。(第 7 曲)
- ・「御言葉は速やかに走り、羊の毛のような雪を降らせ、灰のような霜をまき散らし、氷塊をパン屑のように投げられる」(詩編 147 : 第 10 曲)

このように「白い」ものばかり列挙された詩行を見ると、第3曲の「黒いけれど美しい」、第9曲の「曙の光の如く上り赤く輝く」が思い出され、錬金術の言う卑賤なものが金となる過程、「黒→赤→白」が見て取れ、いよいよ「神の子」の出現が予感されるのです。

無論こんなことに興味を抱いても、それが直接演奏技術に反映するわけではないのですが、テキストに隠された隠喩に触れることによって心身が活性化し、練習や演奏への意欲をさらに掻き立てられたのは事実です。

6月24日(金) 午後7時 武蔵野市民文化会館[ARTE]小ホール

淡野弓子メゾソプラノ リサイタル

ピアノ/オルガン: 武久源造 ピアノ: 黄 永燦 (Wong Wing Tsan)

R. シューマン 《リーダークライス Op. 39》

新作・語りと歌のための幻想即興曲 《小町の芍薬》

(Text: 岡本かの子、Sound Inspiration 《MOON TALK》 黄 永燦)

構成 武久源造/ 黄 永燦/ 淡野弓子

それまで主としてヨーロッパ系の言語で歌ってきた私は、一つ一つの言葉がその示す意味内容にピッタリの音型や和音に変えられ、音楽を聴けば意が通ずる、ということを経験すればするほど、これが日本語であったらどのような歌になるのかということの日々考えるようになりました。

すでに美しい日本歌曲は多数作曲され、伝統芸術に至っては無数の日本語の表現と発声が存在しています。私はここで詩文ではなく散文を音楽化してみたいと考えました。折も折り私はウォン (Wong Wing Tsan) さんのCD 《MOON TALK》を聴き、この音楽とともに文章を読む、というアイデアが浮かんだのです。

《MOON TALK》はピアノによるイムプロヴィゼーションで、聴く人の現在意識と潜在意識が代わる代わる入れ替わり、半ば夢を見ているような状態に誘い込んでリラックスさせる力を持った音楽です。このような音楽には過現未の交錯するような物語がよいと思い、岡本かの子の『小町の芍薬』に決めました。

詳しい内容は略しますが、この試みに発した日本語への挑戦は20年たった今、ある種の結実を迎えようとしており、不思議な思いに包まれています。

7月16日(土) 午後6時 沼津市民文化センター大ホール

沼津合唱団演奏会～新しい響きを求めて

共演: ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京

指揮: 淡野弓子

ラッソ、パレストリーナのモテットほか 沼津合唱団

シュッツのモテット シュッツ合唱団

ラッソ 《シビュラの預言》全曲 沼津 & シュッツ合唱団

柴田南雄 《宇宙について》 沼津 & シュッツ合唱団

沼津合唱団は1993年まで故 中村義光氏の真摯かつ熱情的な指揮のもとに40年の歴史を刻んだ合唱団でしたが、中村先生は1990年に病に伏され、その後先生の御承諾のもとに私が指導に伺うようになりました。1993年9月、中村先生が逝かれ、私は後任として1994年1月より沼津合唱団指揮者として働くことになったのです。

沼津合唱団との初公演にラッソの《シビュラの預言》と柴田南雄の《宇宙について》を取り上げたという無謀な突進を今更驚いても遅いのですが、プログラムには「声の冒険●心の飛翔」というタイトルが踊っています。

沼津合唱団59名、シュッツ合唱団36名、計95名という人数が記録されていますが、実際の本番は91名だったようです。この公演では全員が、前面が白、背面は各自の選択に任された自由な色、模様という貫頭衣風の衣装を作りました。隠れキリシタンのオラッシュャから少しづつ人が動き始めると背面の模様が見え隠れし、諸民族の

礼拝歌に移り、色々なグループがそれぞれ違う歌を同時に歌い出すのです。この頃には客席に背中を向けている人、足踏みをする者など入り乱れ、「初めと終わりはかくて結ばれ、一つの円となる」というコプト教会の讃美歌に付けられた歌詞とともに全員がステージ一杯一つの円となりました。続く華厳経が始まると一人また一人とステージから客席に降り、華厳経が終わる頃には全員が客席に散らばって最後の巡礼歌「しばた山」を歌いました。「しばた山」の先唱を務めた沼田合唱団の山下洋一さんは、声といい、風格といい役にぴったりで、聴き手の方は勿論、共演したシュッツ合唱団のメンバーも一様に感激してしまいました。山下さんはこの日の会場、沼津市民文化センターの館長さんでいらしたそうです。

《宇宙について》は実に気持ちの良いエネルギーに溢れる作品ですが、不思議なからくりも張り巡らされており、いわゆる常識的な合唱作品ではありません。練習の最中に「これで失礼します」と言ってそのまま退団する人も居たほどですが、公演はいつでもどこでも大成功でした。2014年の今年、9月15日には声楽発声学会主催のコンサートでも演奏が予定されています。

この年の9月、旧西独の古都ゾーストで開催される国際ハインリヒ・シュッツ祭に参加することが決まりそれに先立って次のような演奏会が開かれました。

9月7日(水) 午後7時 東京カテドラル聖マリア大聖堂

第33回 国際ハインリヒ・シュッツ祭 参加記念 [国際交流基金助成事業]
ハインリヒ・シュッツ合唱団特別演奏会 指揮: 淡野弓子

ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) 《宗教合唱曲集》(1648)より 〈言葉は肉体となり〉 〈それは確かなまこと〉
クリストフ・ベルンハルト (1628-1692) ダニエルに下った終末の預言 《その時お前の民は救われるであろう》
武久源造 (1957-) カンタータ 《天地創造》
ルドルフ・マウエルスベルガー (1889-1971) 《ルカ受難曲》

1985年以来9年ぶりのドイツ公演とあって、かなり入念な準備をしました。シュッツ祭のテーマは [シュッツとその弟子]です。シュッツの弟子ということで、まずはシュッツの作曲教程を書物に表し、宮廷楽長も務めたクリストフ・ベルンハルト (Christoph Bernhard) のモテット 《Zur selbigen Zeit wird dein Volk erlöset その時お前の民は救われるであろう》を取り上げました。そして時も所も遠く離れているとはいえ、シュッツ作品とその演奏体験から多大な影響を受けた武久源造の新作カンタータ 《天地創造》を歌うことが決まりました。また国際交流基金助成事業として飛行機代の援助が受けられたことも有り難いことでした。

ドイツ演奏旅行は以下のような流れで進み、無事終了致しました。ごらんのようにこの旅行にはアグネス・ギーベル先生が同行して下さり、シュッツの《クライネ・ガイストリッヒェ・コンツェルテ》から〈おお甘き、親しきイエスよ〉や《ムジカーリッシェ・エクセクヴィエン》のソロパートなどを歌って下さいました。

9月17日(土) ベルリン: 大聖堂(Dom)

ソプラノ: アグネス・ギーベル

オルガン: 武久源造 合唱: H・シュッツ合唱団・東京 指揮: 淡野弓子

シュッツ 《詩編116》、ベルンハルト 《その時お前の民は…》、シュッツ 〈おお甘き親しき〉、武久源造 《天地創造》、シュッツ 《ガイストリッヒェ・コーアムジーク》(1648)より 〈それは確かなまこと〉

9月19日(月) ドレスデン: クロイツキルヒェ

ソプラノ: アグネス・ギーベル/ 徳永ふさ子 キタローネ: 竹内太郎

オルガン: 武久源造 合唱: H・シュッツ合唱団・東京 指揮: 淡野弓子

シュッツ 《ムジカーリッシェ・エクセクヴィエン》、シュッツ 〈おお甘き親しき〉、
R. マウエルスベルガー 《ルカ受難曲》

9月20日(火) カッセル: キルヒディトモルト教会(ソリストほか同上)

シュッツ 〈言葉は肉体となり〉

武久源造 《天地創造》

シュッツ 〈おお甘き親しき〉 〈主によって喜びをなせ〉

R. マウエルスベルガー 《ルカ受難曲》

9月21日(水) エンガー: シュティフト教会(ソリストほか同上)

シュッツ 《ムジカーリッシェ・エクセクヴィエン》、シュッツ 〈おお甘き親しき〉

武久源造 《天地創造》

9月23日(金) ゴースト: ヴィーゼン教会(St. Marien zur Wiese)

〈第33回国際ハインリヒ・シュッツ祭〉

ソプラノ: アグネス・ギーベル キタローネ: 竹内太郎

オルガン: 武久源造

シュッツ 《詩編116》、ベルンハルト 《その時お前の民は…》、シュッツ 〈おお甘き親しき〉、武久源造 《天地創造》、シュッツ 《ガイストリッヒェ・コーアマジーク》(1648)より 〈それは確かなまこと〉

さて前述のルドルフ・マウエルスベルガーは、ドレスデンのクロイツ・キルヒェ(聖十字架教会)のカントールとしてシュッツ以来の伝統を直接その身に背負った人でした。《ルカ受難曲》の書かれた状況は既にお話しましたが、この楽譜は1985年第1回ドイツ演奏旅行の折、ドレスデンの音楽学者マティアス・ヘルマン氏が下さった何曲かの珍しい楽譜の1冊だったのです。この曲は当時ドイツでも滅多に演奏されることがなかったらしく、カッセルのキルヒディトモルト教会のカントールが是非聴きたいと言われ、9月といえば受難節ではありませんでしたが、ドイツで演奏することになり、この年の3月に日本初演したこの作品をもう1度歌いました。

《ルカ受難曲》の譜面を出版した旧東ベルリンの出版社は統合後に消滅し、楽譜の購入に悩んでいたのですが、長年お世話になっているミュージック・サプライの天崎浩二さんが探し回って下さり、ついに40冊の譜面が届いた時には、皆が声を上げて楽譜に駆け寄ったのを覚えています。その後もその前も天崎さんは入手困難な楽譜をどこからか見つけ出して下さり、どれほど助かったことでしょう。

ことあるごとに話題となるこの作品には単なる音楽以上のなにか強い力が働いているのでしょうか。ごく最近では荒川恒子先生の遭遇されたエピソードも含め、回を改めてお話ししたいと思います。

武久源造《天地創造》はルター訳のドイツ語聖書創世記第1章第1節から第2章第3節をテキストとし、神が6日かかって天地を創造し、7日目に休まれた、までが作曲されたものです。ドイツでは大反響を呼び、1994年9月22日付ヘッセン・ニーダーザクセン・アルゲマイネ・「ツァイトウング紙」には「音と言葉が一つとなった合唱の響き」との見出しで次のような批評が掲載されました。

「音楽とは何か？」これはカッセル・キルヒデイトモルト教会で東京のハインリヒ・シュッツ合唱団が演奏した際、《天地創造》の作曲者で盲目の武久源造が提示した問いである。半時間におよぶドイツ語の作品の中で彼は、人の声のアンサンブルが表現し得るすべての響きの可能性を、常にテキストの示す通りに、有機的な全体の響きへと結び合わせていった。原初のカオスからいかに世界は浮上したのか。原始的な「ホッ ホッ」という声が、グリッサンドで下がりチッ チッという音が弾けるとユニゾンとなり更に思いがけない短調の和音、フーガ、ゴスペルの響き。天地は音楽と共に音楽によって生まれ、音楽は天地創造によって成立するのだ。全く想像を絶した、緊張に満ちた聴体験であった。音楽がテキストを伝えたのである。シュッツにおいてもこのことは有効に働いた。冒頭の6声のモテット〈言葉は肉となり〉の演奏は目がつんでおり、文化の隔たりにもかかわらず、内的緊張とテキストの理解がはっきり伝わってきた。コンサート全体を通じて、なんとといっても強く心に残るのは、この合唱団の創立者で指導者の精密かつ表現力に富んだ指揮である。[後略]

ヨハネス・ムンドゥリイ

ゾーストの街を散歩していると「ああ、あなたが日本のシュッツ・コアの……知っていますよ」とにこにこ笑いながら近寄って来られた今は亡きシュッツ学者シュトイデ教授 (Prof. Dr. Wolfram Steude 1931-2006)、一瞬にして人を解放させるお姿、雰囲気、たたずまいでした。私たちの演奏をお聴き下さったことも嬉しく貴重な思い出の一つです。

11月3日(木)午後7時 石橋メモリアルホール 〈レクイエムの集い〉

クラウディオ・モンテヴェルディ 《愛する女の墓に流す涙》

柳澤一枝、羽鳥典子、細川裕介、淡野太郎 & アンサンブル・クラウディオ

ガブリエル・フォーレ 《レクイエム》

ソプラノ：嶺貞子 バリトン：宮原昭吾

合唱：アンサンブル・クラウディオ & ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京

オーケストラ：シンフォニア・ムシカ・ポエティカ

Vn: 小野萬里、竹嶋祐子 Va: 李 善銘、森田芳子、渡部安見子、S. Sieben、成瀬かおり Vc: 渡辺真帆子、西澤央子 Vc: 諸岡範澄、鈴木康史

Kb: 西澤誠治、桜井 茂 Hr: 井手詩朗、関川純二、窪田克己、瀬在正生

Trb: 萩谷克己、利根川勝、山城純子 Fg: 井上俊次、越 康寿

Timp: 永曾重光 Harp: 早川りさ子 Org: 武久源造 指揮: 淡野弓子

モンテヴェルディとフォーレ？ 奇妙なプログラミングだなと思われた方も多いのではないでしょうか。この2曲は次のようないきさつで私の中に浮かんだアイディアでした。1970年代後半、私はアメリカで一枚のレコー

ドを見つけました。そこにはモンテヴェルディのマドリガルが9曲収められており、曲の造りがはっきり分かる非常に明晰な演奏でした。しかしその歌い方は様式に則った、とか、作曲された当時の演奏スタイルに忠実な、といったものとは全く次元の異なるものでした。そこに渦巻いていたのは、作品に対する深い信頼と存在の根源に迫ろうという激しい情熱でした。指揮はナディア・ブーランジェ。彼女はそれまで発掘されずにいたモンテヴェルディの作品を数百年ぶりにこの現世に解き放ったのです。それは1937年彼女が50歳の時のことで、彼女の最初のレコードであり、モンテヴェルディが録音されたのもこれが初めてでした。

次に知ったのは、ブーランジェはガブリエル・フォーレの弟子であるということでした。『ナディア・ブーランジェとの対話』(佐藤祐子訳・音楽之友社)の中で彼女はフォーレについてこう語っています。「実際私にとって特に大事であったのは、フォーレのクラスです。私たち生徒はそれぞれの人生を照らし、導いてくれたフォーレから多大な影響を受けました。彼の気品溢れるセンス、無類の慎み深さと冷静さ、その超俗的な視野に感化を受けたのです。」

ブーランジェが結ぶモンテヴェルディとフォーレの糸はさらに先へ伸びて行きました。ブーランジェの後任としてパリ音楽院で教えておられたピュイグ・ロジェ先生はのちに東京藝術大学でも教鞭をとられ、多くの音楽家とともにコンサートを開かれました。そしてこの日フォーレ《レクイエム》のソプラノソロは、ロジェ先生との名演を数多く残しておられる嶺 貞子さんだったのです。ロジェ先生は1992年11月24日に旅立たれました。1994年の〈レクイエムの集い〉プログラム追悼のページにお名前が掲載されています。

1994年は12月25日(日)本郷教会のクリスマス・コンサートとともに終わり1995年を迎えました。(続く)

おことわり

野本さん、淡野さんは、ほぼ同時代を生き、重なりあう体験も多くなさっておられます。またおふたりの御論考中には、同時代の他の方の感想文ですとか、引用も含まれます。編集する者として、どのように扱うべきかと考えさせられることのひとつに、作曲家、曲名等の日本語表記があります。ともすると頭が硬くなり、どのように統一を取るべきか、とか原語の発音にどのようにしたら近づけるか等々、工夫をした時期もあります。しかし野本さんの御言葉から、シュッツのことを「シュス」と表記した方あるいは時代があることを覚えます。また日本支部は、今でも正式名称として「ハインリッヒ・シュッツ協会」と名乗っています。これを今多くの方が用いる「ハインリヒ・シュッツ」に変更することは、さほど難しいことではありません。しかしながら・・・言葉は絶えず変化しています。どれがより正しいとか、良いということに関して、口吻を飛ばして議論することに、それほど意味があるのか、と考え直しました。むしろこの表記の仕方を通して、先輩方が知ったシュッツの音楽や、皆様方の置かれていた環境が、周辺が、想いが伝わってくるようにも感じます。そこで編集とは名ばかり、本当のケアレスミスのみは変更いたしました。ほぼ原文通りに掲載させていただいております。統一という点からみれば、矛盾をお感じの方もおられましょう。御了承くださいませ。

会員の活動状況

(皆様の御活動に関して、互いに関心を持ちあい、御協力いただけることもあろうかと考えます。しかし事務局ニュースレターは年二度の発行なので、時期がうまく合わずにお伝えできていないものも、多々あります。また一応「ハインリヒ・シュッツ協会」という共通項がありますので、どのようなものを御紹介すべきか、編集部としても、迷うことがあります。しかし野本氏、淡野氏の御論の読みながら、柔軟に対処することの大切さを教えられております。今回は自己申告および編集部で見つけた情報を、適当に組み合わせて、会員名あいうえお順で、記載させていただきます。御了承くださいませ)

1) 荒川恒子 (お問い合わせ eterna@nifty.com Tel/Fax 045-421-0502)

- ・2014年11月30日(日) 15:30- 於: 山梨県立図書館多目的ホール
第85回「ムジカ エテルナ 甲府」定期演奏会
- ・連載「ドレスデンにおけるフルート奏法概観」(エッカルト・ハウプト著 荒川恒子訳・監修) 季刊『ムラマツ』5, 6, 7回

2) 井形ちづる

- ・『ヴァーグナーオペラ・楽劇全作品対訳集 《妖精》から《パルジファル》まで』(2013・3・13) 水曜社

3) 今井奈緒子

- ・2014年7月15日(火) 18:30 於: 東北学院土桶キャンパス礼拝堂(<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp>)
「時代の音」シリーズ第1回 一カンタータへの道 D. ブクステフーデを中心に
- ・2014年9月27日(土) 於: 明治学院大学礼拝堂 (<http://www.meijigakuyuin.jp>)
オルガン・リサイタル
- ・2014年10月2日コペンハーゲン音楽大学で講演、その後デンマーク国教会でコンサート開催

4) 佐藤 望(お問い合わせ 慶應義塾大学日吉キャンパス音楽学研究室 <http://musicology,hc.keio.oc.jp/>)

- ・2015年2月28日(土) 14:30 於: 日本基督教団・阿佐ヶ谷教会、
2015年3月1日(日) 14:30 於: 慶應義塾大学日吉キャンパス 協生館2階ホール
ブクステフーデ: Membra Jesu nostri

5) 淡野弓子

- ・2014年9月15日(月・祝) 15:00 於: 三鷹芸術文化センター「風のホール」
日本声楽発声学会創立50周年記念演奏会「歌の集い」[9]に「アンサンブル・アクアリウス」「ハインリヒ・シュッツ合唱団」を率いて参加。柴田南雄《宇宙について》その他を演奏
- ・2014年11月14日(金) 19:00 於: 三鷹芸術文化ホール「風のホール」
〈レクイエムの集い〉2014開催 メンデルスゾーン《挽歌》《夕べの祈りの歌》および江端伸昭《海にヴァイオリンがきこえる》を演奏 (お問い合わせ <http://www.musicapoetica.jp>)

6) 橋本周子

- ・2014年5月17日(土) 15:30- 17:00 於: 朝日カルチャーセンター 新宿教室
「音で感じる宗教 聖書の言葉が響く時 グレゴリオ聖歌の世界」講演

- ・2014年4月28日(月) - 29日(火・祝) (終了) および10月12日(日) - 13日(月・祝)
 於: 聖グレゴリオの家 (お問い合わせ <http://www.st-gregorio.or.jp/>)
 第34回教会音楽講習会開催 グレゴリオ聖歌 なぜネウマ譜なのか 「音で語る聖書のことば」

7) 米沢陽子

- ・2014年7月5日(土) 13:30 於: 東京純心女子学園江角記念講堂
 レクチャーコンサート「聖霊降誕祭のグレゴリオ聖歌とオルガンの調べ」
- ・2014年9月27日(土) 14:00 於: 東京純心女子学園江角記念講堂
 レクチャーコンサート「J.S. バッハ: ライプツィヒ・コラール集(抜粋)」
- ・2015年3月7日(土) 14:00-15:00 於: 神戸松陰女子学院大学チャペル
 レクチャーコンサート「北ドイツとバッハ」
- ・2015年3月15日(日) 13:30 - 14:30 於: 日本バプテストキリスト教目白が丘教会
 オルガンコンサート

本部だより

- 1) 本年コペンハーゲンで開催されるシュッツ・フェストに関しましては、すでにメールで交信できる方には、御連絡いたしました。昨年のヴェネツィア大会に続き、今年も外国。そのいずれもが、シュッツの生涯にとっては、重要な意味を持つ場所。ということで本部はその準備に、大変御苦労されておられるはず。その間に契約していたホテルも満杯となりました。しかし市中には沢山のホテルがあります。急に御予定が空いたということでお出かけも可能です。その際、協会の方には、割引チケットを購入できます。冊子にerm. と記された価格で、御購入くださいませ。
- 2) 2015年大会は、まさにシュッツ生涯の中心地、ドレスデンで2015年10月1日 - 4日に開催されます。その際最後の日の午後、2015年10月4日 15:00 より聖母教会カントル、マティーアス・グルーネルト氏の御指導のもと、開催中に練習する合唱を、聖母教会『日曜宗教音楽コンサート』の中に位置づける、という計画が持ち上がっています。日本支部からも、いつも「合唱プロジェクト」に参加され、フェストを締めくくる音楽付き礼拝で、歌われる方がおられます。どなたでも御参加がかないます。御都合よろしく、御一緒にお出かけいただければ、大変うれしく存じます。御予定くださいませ。